

6. 医学部・医学研究院

I	医学部・医学研究院の研究目的と特徴	6-2
II	「研究の水準」の分析・判定	6-4
	分析項目 I 研究活動の状況	6-4
	分析項目 II 研究成果の状況	6-14
III	「質の向上度」の分析	6-34

I 医学部・医学研究院の研究目的と特徴

1. 研究目的

医学とは、人体の構造と機能を解明するとともに、疾患の診断、治療、予防の方法を開発する学問である。医学研究院は各構成分野が独自性を持った世界最先端の医学研究を推進するとともに、分野間の有機的統合によって、医科学と医療及び保健学をリードする研究の遂行及び優れた研究者並びに医療人の育成を通して国際社会に貢献することを目的とする。大規模コホートやビッグデータを活かした研究を遂行するとともにアジアを中心とした世界各拠点の病院との遠隔医療ネットワークを推進することが医学研究院の強みであり重要なミッションである。これらの研究を推進することで以下の本研究院の目的を達成する。

- ① 基礎医学、臨床医学、先端医療医学において分野間の連携を推進し国際レベルの研究教育拠点の形成を目指す。医学、生命科学をリードする独自性、新規性の高い研究の遂行により国際社会に成果を還元するとともに、他の領域との連携、融合を拡大、深化させ、架橋型研究を推進する。
- ② 基礎医学、臨床医学、先端医療医学の研究成果を公開し、社会への還元を進める。これらの研究成果を学会、学術論文に発表し、市民公開講座等により一般市民へ還元するとともに、研究成果を医療関連企業との共同研究として発展させる。また、ホームページを充実させ、研究成果の公開を進める。
- ③ 競争的研究資金を活用した高水準の研究の実施と人事の流動化を促進する。科学研究費補助金の採択率を向上させ、大型の組織的競争的研究資金を獲得する。
- ④ 世界的研究・教育拠点にふさわしい学術研究活動を促進する。戦略的見地に立って優秀な人材を確保し、世界をリードできる研究を実施する。

2. 研究成果に関する方針（OP、アウトカム・ポリシー）

① 学術的インパクト（質・量）

論文、学会発表、特許出願の数は研究成果に関する学術的インパクトを評価する有用な指標となる。医学研究院では積極的に論文投稿や学会発表を行うことを強く推奨する。特に論文についてはインパクトファクターや引用件数はその論文の質を評価する有用な指標となることから、インパクトファクターの高い雑誌への論文採択を強く推奨する。さらに競争的研究資金の獲得は論文実績の評価によるところが大である。さらなる研究の発展にも資することから、これらの資金獲得を強く推奨する。

② 社会的関連性（質・量）

医学研究は疾患の診断、治療、予防の方法を開発するとともに、これらの成果を社会に還元することが最終的な目的である。そのために、研究成果を学会や学術論文に発表するとともに、市民公開講座やホームページを活用することで、本研究院で得られた成果について一般市民に還元することに積極的に取り組む。さらに得られた研究実績を基盤に医療関連企業との共同研究を積極的に推進し、新たな診断法や治療法の開発を行うことで、成果を社会に還元する必要がある。以上を念頭に、本研究院は、共同研究、受託研究、寄附講座などの設置を積極的に推奨する。

3. 研究組織運営に関する方針（MP、マネジメント・ポリシー）

① 研究組織・体制

基礎医学、臨床医学、先端医療医学部門の各分野を再編し人材の招聘が可能となる体制を構築する。本研究院長の指導のもとで、本研究院全体の戦略的研究プロジェクトを立案し、大型の競争的研究資金を獲得する。P&P（教育研究プ

九州大学医学部・医学研究院

プログラム・研究拠点形成プロジェクト)は、一定の期間、研究費等の重点配分を行い、教育と研究の一層の発展を図ることを目的とする九州大学独自の研究支援制度であり、本研究院においても、P&Pを活用し若手研究者の自立的な研究環境を整備し、集中的に支援することで、研究の一層の発展を促し、新たな競争的資金の獲得の原動力とする。

② 支援・推進体制

本研究院長が中心となって、研究戦略委員会を再編し、本研究院全体の戦略的研究プロジェクト立案の支援を行う。研究資金の獲得のために医学研究院と事務部局と緊密に連携し研究費獲得を行う。

③ 内部質保証（評価・改善）

本研究院の研究活動を点検、評価するとともに、中期目標に合致した活動が行われるように改善の支援を行う。

④ 情報公開

研究成果については、学会や学術論文に発表するとともに、市民公開講座やホームページを活用して、情報公開に努める。

4. 研究基盤整備に関する方針（IP、インフラストラクチャー・ポリシー）

① 研究施設・設備

研究施設や設備を整備することは研究の遂行に必須の要件である。既存の施設、設備の有効活用を推進するとともに、概算要求などによってその充実を図る。

② 研究資金調達

競争的研究資金の獲得は研究の遂行のために極めて重要であり、積極的な獲得を推奨する。特に、本研究院長の指導のもとで、本研究院全体の戦略的研究プロジェクトを立案し、大型の競争的研究資金を獲得する。

以上の研究目的と特徴は、本学の中期目標記載の基本的な目標「研究においては、卓越した研究者が集い成長していく学術環境を充実させ、世界的水準での魅力ある研究や新しい学問分野・融合研究の発展及び創成を促進する。また、環境・エネルギー・健康問題等人類が抱える諸課題を総合的に解決するための研究を強力に推進し、国際社会・国・地域の持続可能な発展に貢献する。」を踏まえている。

[想定する関係者とその期待]

医学とは、人体の構造と機能を解明するとともに、疾患の診断、治療、予防の方法を開発する学問である。その成果は直接的、間接的に全ての国民が享受すべきものであり、医学研究に対する国民の期待は大きいと言える。また、あらたな診断技術や治療方法の開発において産学連携が極めて重要であり、医学研究院の成果に対する医療関連企業の期待も大きい。

II 「研究の水準」の分析・判定

分析項目 I 研究活動の状況

観点 1-1 研究活動の状況

(観点に係る状況)

本研究院では、1961年にスタートした地域コホートである久山町研究、脳卒中患者を対象とした疾患コホートである脳卒中コホート研究、環境コホートである油症コホートなど約6万人を超える地域・疾患・環境コホート群を有し、多くの重要な発見を世界に発表しており、その極めて高い精度に対する国際的な評価は高く、国際共同研究へと発展している。さらにアジアを中心とした遠隔医療の実績からミッションの再定義において、本学医学分野のミッションとして“大規模コホートやビッグデータを活かした研究、アジアを中心とした世界各拠点の病院との遠隔医療ネットワーク構築”が定義された。

これらの強みをさらに発展させるために医学研究院長の主導のもとに副研究院長や各部門長との緊密な連携のもとに研究体制の再編・強化を行ってきた。九州大学病院において、医療情報や医療における大容量データの利用、研究推進のため、平成23年に医療情報部と電算化推進室を統合し、メディカル・インフォメーションセンターを設置した。さらに、環境中の化学物質等が子どもの成長や発達に与える影響を明らかにする大規模疫学調査の目的で、平成23年に環境発達医学研究センターを設置した。将来、世界的にも例のない新知見が明らかになると期待される。また、基礎医学研究からヒトを対象とする臨床医学研究への展開を推進する目的で、平成24年にヒト疾患モデル研究センター、応用幹細胞医科学部門応用幹細胞医科学講座を設置した。さらに、平成26年には、地域・疾患・環境コホート群を基に分野横断的研究を促進する中核的組織として総合コホートセンターを設置した。平成27年度より国家プロジェクトである大規模認知症コホート研究の中央事務局を担当するとともに、米国ハワイのクワキニ医療センター並びに豪州ジョージ国際保健研究所との間で学術交流協定を締結し、国際共同研究を遂行中である。

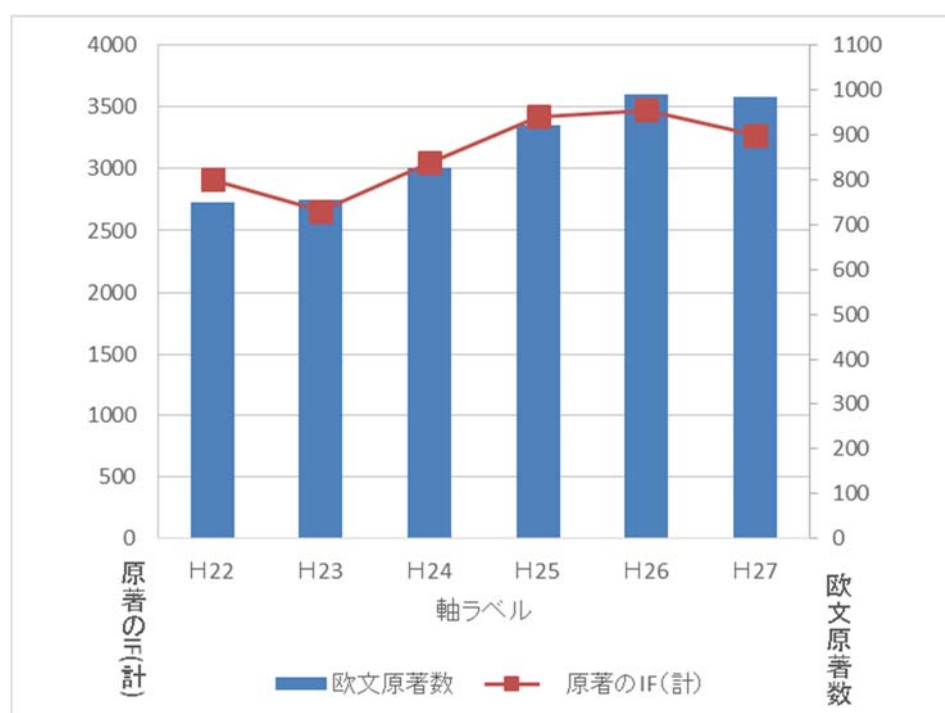
1-1-1 論文・著書等の研究業績や学会での研究発表の状況

論文・著書等の研究業績や学会での研究発表の状況については、資料1に示すとおりである。論文の発表状況については、原著論文数が飛躍的に増え、特に平成22年度以降は毎年700編を超え、さらに平成25年度以降は900編を超える論文を発表している。インパクトファクター合計も着実に増えており、特にIF10以上の論文は平成24年度以降毎年20編を超えている。これら原著論文の評価は高く、引用回数の増加によっても明らかである。また、症例報告、総説、著書等の公表状況については、欧文、和文ともに高いレベルを維持しており、国内外での特別講演並びに招待講演とともに、幅広い活動を行ってきた。以上のように、研究成果に関する方針(OP、アウトカム・ポリシー)に沿って、研究発表を行っている。

○資料 1 論文の発表状況

年度		H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
欧文原著数		749	756	824	922	998	983	5232
原著のIF(計)		2910.584	2659.013	3028.261	3421.017	3508.525	3270.378	18797.778
IF10以上の原著数		32	25	40	46	40	21	204
原著のCI(計)		12638	8644	6319	4304	1386	579.91	33870.91
教員一人当たりの原著数		3.34	2.99	3.26	3.56	3.6	3.6	—
症例報告	欧文	90	89	101	98	101	106	585
	和文	95	96	127	141	115	103	677
総説	欧文	41	53	55	42	55	48	294
	和文	578	626	618	531	509	486	3348
著書	欧文	11	10	16	29	16	22	104
	和文	346	395	300	382	264	187	1874
班会議報告等		167	216	205	184	239	149	1160
主催した会議・シンポジウム等(※1)	国際会議	10	6	9	11	13	18	67
	国内会議	139	156	161	184	209	204	1053
特別講演	国際会議	63	64	71	60	53	63	374
	国内会議	401	433	433	553	536	418	2774
招待講演	国際会議	85	91	95	109	85	70	535
	国内会議	301	390	379	436	487	470	2463
学会賞等		47	49	70	74	75	79	394

欧文原著数及び原著 IF (計)



1-1-(2) 研究成果による知的財産権の出願・取得状況

知的財産権の特許の出願・取得状況については、年度によって変動はあるが、毎年度10件を超える特許を登録している(資料2)。以上のように、研究成果に関する方針(OP、ア

ウトカム・ポリシー) に沿って、知的財産権の出願・取得を行っている。

○資料 2 知的財産権の出願・取得状況

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
特許出願件数	40	52	33	38	12	7
特許登録件数	10	12	28	20	13	16

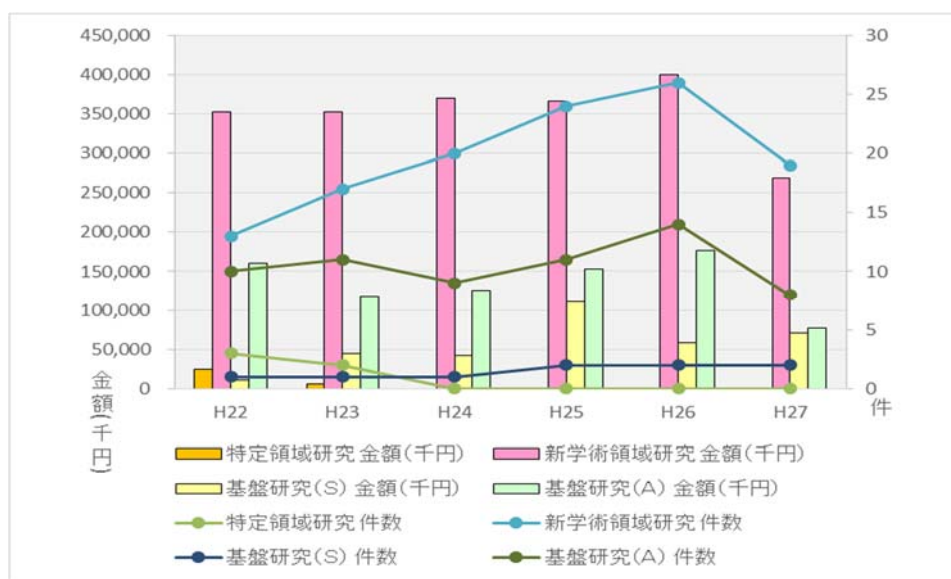
1-1-(3) 競争的資金受入状況、共同研究受入状況、受託研究受入状況、寄附金受入状況、寄附講座受入状況

文部科学省科学研究費補助金については、年々受入総額が増え、平成 26 年には 12.3 億円を超えた。平成 26 年度には申請件数が減少したが、採択件数は右肩上がりの伸びを示しており、一課題あたり、教員一人あたりの配分額も増えている。平成 27 年の受入額が減少しているが 69 名の教授のうち 12 名の教授 (17.8%) が定年等で退職したことが主因である。現在、後任人事を進めており今後回復する予定である (資料 3)。厚生労働科学研究費補助金については、資料 4 に示すとおり第 2 期期間内において採択件数は増加しているが受入総額は年々減少傾向にある。しかしながら、第 1 期に比較すると大幅に増額しており、5 年間で 65.8 億円の研究資金を受け入れている。その他の競争的研究資金については、資料 5 に示すとおりである。また、応用研究の社会連携としての企業との共同研究 (資料 6)、受託研究 (資料 7)、寄附金 (資料 8)、寄附講座 (資料 9) もコンスタントに受け入れている。以上のように、研究資金の獲得は研究の遂行のために極めて重要であり積極的な獲得を推奨するという研究基盤整備に関する方針 (IP、インフラストラクチャー・ポリシー) に沿って、受入れを行っている。

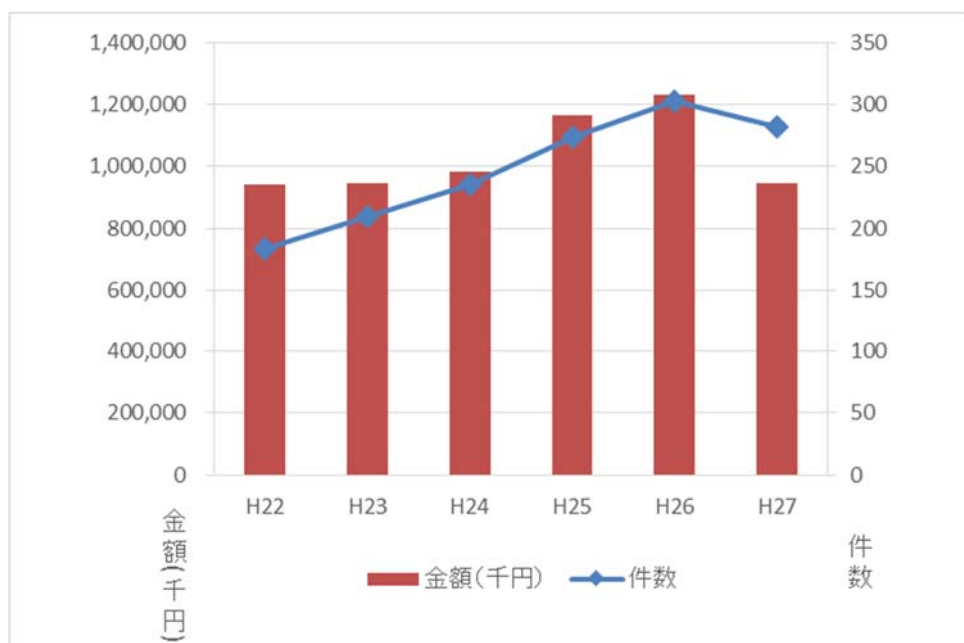
○資料 3 科学研究費補助金の受入状況

科学研究費補助金の採択件数及び交付金額

年度	特定領域研究		新学術領域研究		基盤研究(S)		基盤研究(A)		左記以外		計	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
H22	3	24,000	13	353,210	1	10,790	10	160,810	157	393,396	184	942,206
H23	2	6,400	17	352,950	1	44,200	11	118,300	178	424,008	209	945,858
H24			20	369,720	1	42,640	9	125,710	205	446,160	235	984,230
H25			24	366,860	2	110,500	11	153,140	237	535,560	274	1,166,060
H26			26	400,660	2	57,850	14	177,190	261	596,440	303	1,232,140
H27			19	268,970	2	70,590	8	76,570	253	527,280	282	943,410



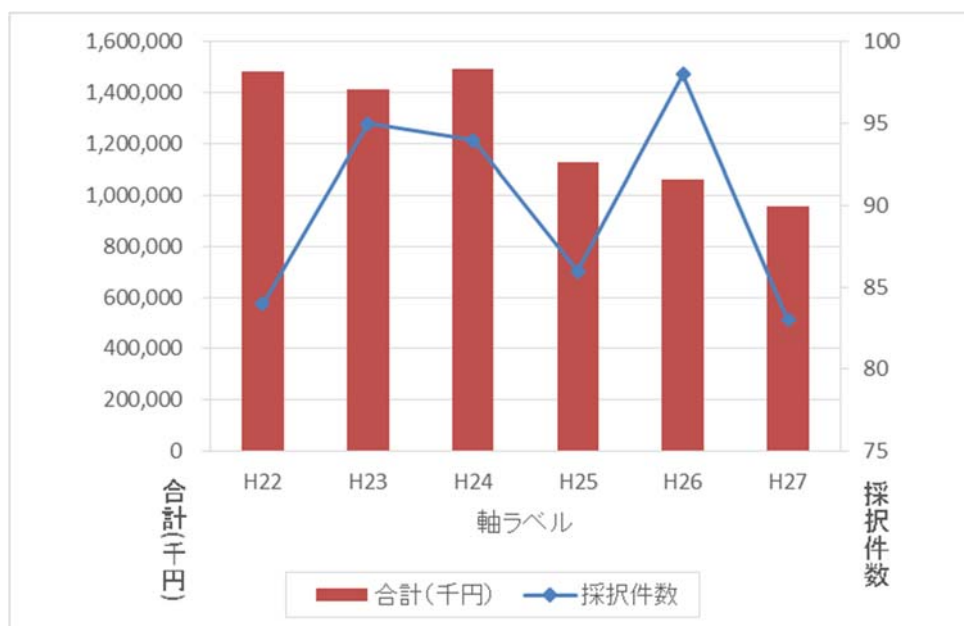
採択件数及び交付金額合計



○資料 4 厚生労働省科学研究費補助金の受入状況

厚生労働省科学研究費補助金の採択件数及び交付金額

年度	採択件数	教員現員(前年度の5月1日)(人)	直接経費(千円)	間接経費(千円)	合計(千円)	採択件数1件あたりの金額(千円)	教員現員1人あたりの配分額(千円)
H22	84	221	1,284,201	200,532	1,484,733	17,675	6,718
H23	95	222	1,176,579	238,676	1,415,255	14,897	6,375
H24	94	252	1,302,481	192,635	1,495,116	15,905	5,933
H25	86	248	919,628	207,863	1,127,491	13,110	4,546
H26	98	260	885,575	179,705	1,065,280	10,870	4,097
H27	83	269	831,987	126,679	958,666	11,550	3,563

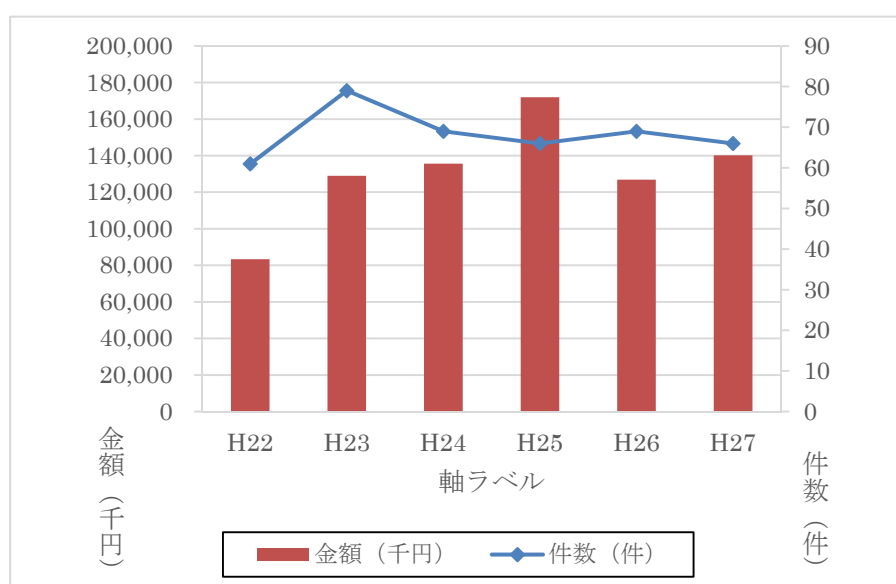


○資料5 その他競争的資金受入状況

競争的資金の種別	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
件数 (件)	3	4	5	5	6	3
金額 (千円)	105,907	80,135	206,320	196,081	172,104	97,500

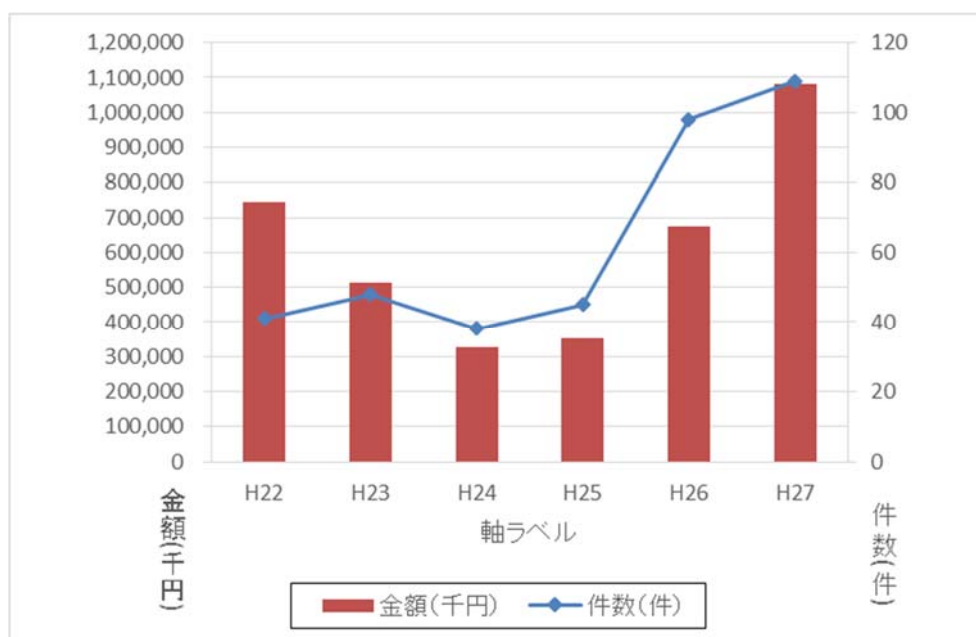
○資料6 共同研究受入状況

年度	件数 (件)	金額 (千円)
平成 22 年度	61	83,361
平成 23 年度	79	128,976
平成 24 年度	69	135,649
平成 25 年度	66	171,939
平成 26 年度	69	126,900
平成 27 年度	66	140,152



○資料7 受託研究の受入状況

年度	件数 (件)	金額 (千円)
平成 22 年度	41	744,235
平成 23 年度	48	513,536
平成 24 年度	38	325,125
平成 25 年度	45	350,480
平成 26 年度	98	674,716
平成 27 年度	105	1,069,827



○資料 8 寄附金受入状況

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
件数 (件)	994	975	1,045	1,031	969	981
金額 (千円)	1,441,129	1,245,635	1,224,986	1,130,619	1,186,398	1,130,800

○資料 9 寄附講座受入状況

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
件数 (件)	14	14	14	14	17	12
金額 (千円)	495,000	432,000	410,000	413,000	440,500	305,500

講座名	設置期間	寄附総額 (百万円)	寄附者
包括的腎不全治療学講座	平成 18 年 5 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日	302	バクスター (株)
未来医用情報応用学講座	平成 19 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日	120	(株)AZE 外 1 社
がん分子病態学講座	平成 20 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日	290	大鵬薬品工業 (株)
がん先端医療応用学講座	平成 20 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日	180	(株)ヤクルト本社
先端心血管治療学講座	平成 20 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日	223	アステラス製薬 (株) 外 2 社
臨床神経免疫学講座	平成 21 年 10 月 1 日～平成 24 年 9 月 30 日	30	バイエル薬品 (株)
外科分子治療学講座	平成 22 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日	160	中外製薬 (株)
分子イメージング・診断学講座	平成 22 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日	300	バイエル薬品 (株) 外 1 社
周産期・小児医療学講座	平成 22 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日	360	福岡県知事
重粒子線がん治療学講座	平成 22 年 7 月 1 日～平成 25 年 6 月 30 日	100	一般財団佐賀国際重粒子線がん治療財団
人工関節生体材料学講座	平成 23 年 2 月 1 日～平成 30 年 1 月 31 日	156	日本メディカルマテリアル (株) 外 1 社
外科集学的治療学講座	平成 23 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日	120	小野薬品工業 (株)

九州大学医学部・医学研究院 分析項目 I

循環器病先端医療研究開発学講座	平成 23 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日	150	(株) スクラム外 2 社
先端循環制御学講座	平成 23 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日	160	アクテリオンファーマシューティカルズジャパン
神経治療学講座	平成 24 年 10 月 1 日～平成 27 年 9 月 30 日	54	バイオジェン・アイデック・ジャパン (株) 外 3 社
体表感知学講座	平成 25 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日	90	マルホ (株)
地域医療学講座	平成 26 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日	52.5	指宿市
放射線医療情報・ネットワーク講座	平成 26 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日	90	富士フイルム (株) 外 1 社
応用病態修復学講座	平成 26 年 10 月 1 日～平成 28 年 9 月 30 日	70	一般財団法人地域医学研究基金
泌尿器分子創薬学講座	平成 27 年 3 月 1 日～平成 30 年 2 月 28 日	20	旭化成ファーマ (株) 外 3 社

1-1-(4) 大型競争的資金による研究実施状況並びに大型受託研究の実施状況

研究資金による研究の実施状況は、資料 10 並びに 11 に示すとおりである。競争的資金については、循環器領域において心不全治療に関する新規治療法の開発やナノ粒子を用いた新たな Drug Delivery System の開発など先進医療に貢献する画期的な研究に対する大型研究費を獲得した。また、共同研究については、環境省の全国調査であるエコチル、二光子イメージングを用いた神経機能の解明、画期的なエピゲノム手法の開発、癌の新規治療法の開発など、多岐にわたる医学分野で大型受託研究を取得した。以上のように、研究組織運営に関する方針 (MP、マネジメント・ポリシー) に沿って、研究活動を実施している。

○資料 10 大型競争的資金による研究の実施状況

競争的資金	研究実施状況
厚生労働省・医薬品等審査迅速化事業費補助金 (革新的医薬品・医療機器・再生医療製品実用化促進事業)	平成 24-26 年度に砂川賢二教授を研究代表者として、革新的医療機器の有効性又は安全性評価方法確立のための調査研究を実施している。(平成 27-28 年度は九州大学循環器病未来医療研究センターで実施)
JST・先導的創造科学技術開発費補助金	平成 22-26 年度に砂川賢二教授を研究代表者として、「迷走神経刺激による心不全治療の最適化」に関する研究を実施した。
文部科学省・研究開発施設共用等促進費補助金 (橋渡し研究加速ネットワークプログラム)	平成 21-25 年度に江頭健輔教授を研究代表者として、「虚血肢治療用低侵襲ナノ粒子製剤の実用化」に関する研究を実施した。

○資料 11 大型受託研究の実施状況

受託研究	研究実施状況
環境省・子どもの健康と環境に関する全国調査 (エコチル調査)	平成 22 年度から、和氣徳夫教授、原寿郎教授、加藤聖子教授を研究代表者として、環境発達医学研究センターを設置し、環境要因が子どもの成長・発達にどのような影響を与えるのかを明らかにする調査を実施している。
共同研究推進事業 地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム	平成 22-26 年度に吉田眞一教授を研究代表者として、「レプトスピラ症の予防対策と診断技術の開発」に関する研究を実施した。
JST・戦略的創造研究推進事業 CREST	平成 22-26 年度に大木研一教授を研究代表者として「二光子イメージングによる大脳皮質の機能的神経回路の解析」に関する研究を実施した。
NEDO	平成 20-23 年度に橋爪誠教授を研究代表者として「がん超早期診断・

九州大学医学部・医学研究院 分析項目 I

	治療機器の総合研究開発／超低侵襲治療機器システムの研究開発／内視鏡下手術支援システムの研究開発」に関する研究を実施した。
文部科学省・科学技術試験研究委託事業（次世代がん研究シーズ戦略的育成プログラム）	平成 23-27 年度に中西洋一教授を研究代表者として「チロシンキナーゼ阻害剤による有効ながん治療の実用化に関する研究」（肺がんにおける上皮成長因子受容体チロシンキナーゼ阻害薬耐性機構の解明）に関する研究を実施している。
JST/AMED・医療分野研究成果展開事業 先端計測分析技術・機器開発プログラム	平成 26-27 年度に伊藤隆司教授を研究代表者として「高感度エピゲノム解析のためのマイクロ化学システムの開発」に関する研究を実施している。
AMED・革新的がん医療実用化研究事業	H27 年度に沖英次准教授を研究代表者として「腹腔内転移癌を対象とした HB-EGF を分子標的とするがん治療薬 BK-UM の 第 2 相試験」に関する研究を実施している。

1-1-(5) その他研究目的に沿った研究活動の状況

各種疾患の新しい診断法や治療法の開発、地域並びに疾患を対象としたコホート研究、医学史に関する研究やセミナーの開催など医学の進歩に貢献する研究を遂行した（資料 12-1）。さらに、研究院長が中心となって、膵癌早期発見推進事業、総合コホートセンターの推進事業に関する概算要求を行い、採択された（資料 12-2）。このように得られた成果を社会に還元するという研究成果に関する方針（OP、アウトカム・ポリシー）に沿った研究活動を行っている。

○資料 12-1 研究目的に沿った研究活動の状況

年度	研究テーマ	研究内容
平成 20～22 年度	トロンビンによる肺動脈収縮の研究	トロンビンが肺動脈を収縮させる機序を解明する研究。
平成 20～23 年度	トロンビン受容体を標的とする脳血管攣縮治療法の開発	くも膜下出血後の血管攣縮におけるトロンビン受容体の役割を明らかにした。トロンビン受容体を標的とした受容体拮抗薬を用いた治療法の開発研究を行った。
平成 20～23 年度	インテリジェント手術機器研究開発	NEDO の「がん超早期診断・治療機器の総合研究開発」の一環として、世界初の内視鏡外科手術支援システムを開発した。
平成 22 年度	胃癌に関する疫学研究	地域共同体での検診、特に上部消化管内視鏡検査を行い、胃癌及び食道癌の疫学研究を行った。
平成 22 年度	看護史料研究	マイクロカウンセリング技法に基づいた看護のためのコミュニケーション DVD 3 巻作成（丸善）
平成 23 年度	ウイルス性肝炎と糖尿病に関する研究	多数の地域医療機関と共同して、ウイルス性慢性肝疾患の耐糖能異常、糖尿病との関連を研究した。
平成 23～26 年度	トロンビン受容体アンタゴニストを有効成分とする肺高血圧治療法の開発	2012.9.20 国内特許出願 2013.9.18 国際特許出願 （トロンビン受容体アンタゴニストを有効成分とする肺高血圧症の予防治療剤）
平成 24～26 年度	先天性心疾患に起因する肺高血圧の研究	肺血流増多による肺高血圧の病態生理におけるトロンビン及び交感神経系の役割を明らかにするための研究。
平成 24 年度	酸化ストレスに関連する新規診断法の開発	核酸認識分子を応用した新規 8-oxo-dG 簡易測定キットの基礎開発とその実用化
平成 24 年度	疾患コホート研究（慢性腎臓病）	地域共同体との検診での基礎データをもとに、慢性腎臓病の発症率を解析した。
平成 24 年度	研究・教材 DVD の開発	マイクロカウンセリング技法に基づいた看護のためのコミュニケーション DVD 3 巻作成（丸善）
平成 25～26 年度	久山町研究を基盤とした国際共同研究の推進	久山町研究では The George institute for global health（Australia）や Kuakini Health system（Hawaii）などと国際共同研究を実施している。 その他、日本腎臓学会の腎臓病総合レジストリー小委員会、疫学アドバイザーとして、活動した。
平成 25～27 年度	地域住民に対するエ	将来の疾患を予測する「健康みらい予報」を活用した糖尿病対

九州大学医学部・医学研究院 分析項目 I

年度	ビデンスに基づいた生活習慣病対策	策。久山町行政と連携した官学連携の取り組みの推進
平成 25 年度	治療標的の解明	癌転移促進因子が血管内皮細胞から放出されていることを明らかにし、これを同定した。
平成 25 年度	治療標的の解明	血管内皮由来 TGF β 1/2 によって血管の収縮能が維持されていることを明らかにした。
平成 25 年度	特許出願	センサ端末 特願 2013-255145 (園田 英人)
平成 25 年度	肝癌発症機序の解明	多数の地域医療機関と共同して、ウイルス性慢性肝疾患の肝癌発症の研究をした。
平成 25 年度	医学部史料研究	発掘：宮入文庫 (68 冊 和書 39 冊、洋書 29 冊) 平成 25 年度整理リスト集作成・展示
平成 25 年度	医学教育研修セミナー	医学教育セミナーとワークショップ MEDC 看護指導者研修開催 (岐阜大学)
平成 25 年度	ガイドライン作成	うつ病・双極性障害の治療ガイドライン作成
平成 26 年度	応用泌尿器分子創薬学講座	寄附講座開設 (平成 27 年 3 月)
平成 26 年度	新規創薬技術の創出	既存薬を新たな治療標的に用いることを目的としたコンピューター創薬技術を確立した。
平成 26 年度	治療法の改善	新規腹膜透析カテーテルの開発
平成 26 年度	特許出願	低侵襲結紮手術システム 特許第 D14-035 P A 号 (池田 哲夫)
平成 26 年度	多剤併用によるステロイド性骨壊死の発生予防	厚生労働省より先進医療の承認
平成 26 年度	学外研究支援活動	医学教育研究を支援・推進するため、京都大学医学教育推進センターと協力し日本における医学教育研究を志向する若手の医療者を対象にリサーチ合宿を開催している。
平成 26 年度	地域コホートによる動脈硬化に関する研究	地域共同体での検診をもとに、血清脂質異常と動脈硬化性病変の前向き研究を開始した。
平成 26 年度	医学教育研修セミナー	医学教育セミナーとワークショップ MEDC 看護指導者研修開催 (九州大学)
平成 26 年度	医学部史料研究	発掘：古医書 (147 冊 和書 2 冊、洋書 145 冊) 平成 26 年度整理リスト集作成・展示
平成 26 年度	医学教育研修セミナー	医学教育セミナーとワークショップ MEDC 看護指導者研修開催 (埼玉医大)
平成 26 年度	メチローム解析技術の改良と普及	独自のメチローム解析技術 PBAT 法の普及を目指した実地講習会の開催
平成 26 年度	特許出願	Method of producing microglial cells. 特願: 2014-002129 (神庭重信)
平成 27 年度	新規創薬技術の創出	インシリコ創薬手法を用いて薬物標的分子を探索する手法を確立した。
平成 27 年度	脳磁図の臨床応用	独 Springer 社から「Clinical Applications of Magnetoencephalography」を出版。これは日本が世界的にリードするこの分野での臨床研究を編著者としてまとめたものである。
平成 27 年度	顕微鏡下手術支援ロボットシステムの開発	福岡県ロボット産業振興会議 平成 27 年度 医療福祉・社会システム分野対応型 ロボット等製品開発支援事業補助金 直径 1mm 以下の血管吻合等、顕微鏡下手術で必要とされる超精密な手技を、医師がロボットの力を用いて安全かつ容易に実現することができる手術支援ロボットシステムの開発
平成 27 年度	診断法の確立	移植腎の BK ウイルス腎症の早期診断法の確立
平成 27 年度	特許出願	ヒト単球由来ミクログリア細胞のコンパニオン診断・オーダーメイド医療。国際特許出願日 2015.1.9 (神庭重信)
平成 27 年度	学外研究支援活動	医学教育研究を支援・推進するため、京都大学医学教育推進センターと協力し日本における医学教育研究を志向する若手の医療者を対象にリサーチ合宿を開催している。
平成 27 年度	教育力セルフマネジメントプログラムの開発	医療系大学教員に対する「教育力セルフマネジメントプログラム」を Web 上にて開発し公開した。

○資料 12-2 概算要求による研究活動の状況

年度	事業名	経費（千円）
平成 25 年度	膵癌早期発見推進事業	55,500
平成 26 年度		38,383
平成 27 年度		30,706
平成 26 年度	総合コホートセンターを基盤とした新知見発掘の推進と国際的人材育成	37,830
平成 27 年度		30,264

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

資料 1（5 頁）に示すとおり、原著、総説、著書等について、総数・インパクトファクター合計ともに着実に増加している。人件費削減による教員数の減少を考慮するとほぼ同水準で推移していると考えられる。欧文原著論文の平均インパクトファクターは3.8と高い水準であり、また、インパクトファクター10以上の原著数も多く、評価の高い国際誌へ多くの論文が掲載されていることがわかる。また、これらの論文に記載された内容とも関連して国内外の学会における招待講演及び特別講演も頻繁に行っている。さらに、資料 3 並びに 4（6～7 頁）に示すとおり、科学研究費補助金も年度を追う毎に増加しており、研究に対する高いアクティビティを示している。なお、平成27年度の研究費が減少しているのは、平成27年3月で医学部69名の教授のうち12名の教授（17.8%）が定年等で退職したことによるものであり、現在、後任人事を行っており、平成28年度以降は回復するものである。資料11並びに12（10～13頁）に示すように、医学研究院において多様かつ活発な研究活動を行っていること、医学研究院における独自性の高い研究が学内外に広く認められていることがわかる。

以上のことに加えて、第1期と比較して第2期での原著論文の数並びにインパクトファクターは着実に増加していることも勘案し、期待される水準を上回ると言える（後掲資料 18、19（34 頁））。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

2-1 研究成果の状況

(観点に係る状況)

本研究院は構成分野の独自性を尊重しつつも有機的統合により、医科学と医療及び保健学をリードする研究の遂行及び優れた研究者及び医療人の育成を通して国際社会に貢献することを目的としている。この目的を達成するため、倫理性とともに、科学的エビデンスを構築する能力を有する臨床医学研究者、独創的な発想力と高い研究遂行能力を備えた基礎医学研究者、先端医療技術開発などにおいて世界をリードするために前二者の素質を兼ね備えた科学する臨床医、保健学や医療経営・管理学など医学と他分野の知識と経験を融合しかつ統合する多様な人材を有している。

このような構成員によって社会からの多様なニーズに応えながら「人の健康と福祉の増進」を高いレベルで達成している。医学・生命科学領域における先端的研究を積極的に推進してインパクトファクターの高い国際誌に研究成果を発表してきた。これら論文に記載された内容は国内外の学会の招待講演等でも発表した。世界レベルの研究だけでなく、社会医学、保健学、医療経営・管理学を通して、社会への発信、啓発も活発に行っている。

2-1-1 学部・研究科等の組織単位で判断した研究成果の質の状況

受賞の状況については、年度を追うごとに受賞数が増加しており、平成27年度は79件まで増えた。また、資料14(14~18頁)に質の高い論文の一部を示すが、臨床研究ではN Engl J Med、Lancet、JAMA、基礎研究ではNature、Cell、Scienceなど超一流誌への採択件数も増えており、学会等の受賞を受けるなど卓越した学会報告や研究活動を行っている(資料15、16(19~30頁))。これらの成果をもとに、積極的に架橋型研究を推進している(資料17(30~33頁))。以上のように、研究成果に関する方針(OP、アウトカム・ポリシー)に沿って、研究成果が上がっている。

○資料13 受賞の状況

年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
件数	47	49	70	74	75	79

○資料14 組織単位での研究成果の質の高さを示す論文等(IF30以上の論文)

年度	研究者	タイトル	掲載誌	研究概要 (研究内容、外部からの評価等)	IF
平成22年度	Kiyohara Y	Diabetes mellitus, fasting glucose, and risk of cause-specific death	N Engl J Med	われわれが参加する世界最大規模の国際統合コホート研究において、糖尿病がさまざまな死因別死亡のリスクを上昇させることを明らかにした。被引用回数が493回と高く、この分野で世界的に高い評価を受けている。	55.873
平成24年度	Kiyohara Y	C-reactive protein, fibrinogen, and cardiovascular disease prediction	N Engl J Med	われわれが参加する国際共同研究において、C反応性蛋白(CRP)またはフィブリノゲンレベルの上昇が心血管病の予測因子なることを報告した。被引用回数が計221回と高いなど、この分野で高い評価を受けている。	55.873

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

平成 25年 度	Hata J	Rapid blood-pressure lowering in patients with acute intracerebral hemorrhage	N Engl J Med	急性期脳出血における降圧療法の有用性を示した国際共同研究の論文。世界的に高い評価を受け、被引用回数に関してこれまでに134回引用されている。	55.873
平成 22年 度	Kiyohara Y	Diabetes mellitus, fasting blood glucose concentration, and risk of vascular disease: a collaborative meta-analysis of 102 prospective studies	Lancet	われわれが参加する世界最大規模の国際統合コホート研究において、糖尿病によってさまざまな心血管病のリスクが約2倍上昇することを明らかにした。被引用回数が531回と高いなど、この分野で世界的に高い評価を受けている。	45.217
平成 22年 度	Kiyohara Y	National, regional, and global trends in body-mass index since 1980: systematic analysis of health examination surveys and epidemiological studies with 960 country-years and 9.1 million participants	Lancet	われわれが参加する世界最大規模のメタ解析において、肥満度の時代的推移を検討し、1980年から肥満度が世界的規模で上昇しているが、その程度は国によって異なることを明らかにした。被引用回数が1167回と極めて高く、この分野で世界的に高い評価を受けている。	45.217
平成 22年 度	Kiyohara Y	Separate and combined associations of body-mass index and abdominal adiposity with cardiovascular disease: collaborative analysis of 58 prospective studies	Lancet	われわれが参加する世界最大規模の国際統合コホート研究において、肥満度の指標であるBMI、腹囲、腹囲/腰囲比と心血管病との間に有意な関連が認められたが、収縮期血圧、糖尿病の病歴、脂質にこれらの因子が加わっても心血管病のリスク予測能は改善しなかったことを報告した。被引用回数が221回と高く、この分野で世界的に高い評価を受けた。	45.217
平成 23年 度	Babazono A	Japanese universal coverage: Evolution, achievements and challenges	Lancet	日本の健康保険制度の特集として、当講座から尾形裕也と馬場園明が参加し、それぞれ、国民健康保険と被用者健康保険を担当した。	45.217

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

平成 23年 度	Kanba S	Are Japan's hikikomori and depression in young people spreading abroad?	Lancet	現代日本におけるうつ病の増加と引きこもり問題についての洞察	45.217
平成 25年 度	Kiyohara Y	Metabolic mediators of the effects of body-mass index, overweight, and obesity on coronary heart disease and stroke: a pooled analysis of 97 prospective cohorts with 1.8 million participants	Lancet	われわれが参加する大規模国際共同研究において、肥満が虚血性心疾患及び脳卒中に及ぼす影響の1/2~3/4は、高血圧、高コレステロール血症、糖尿病を介することを報告した。この問題に関する世界的規模の統合研究のエビデンスとして、高い評価を受けた。	45.217
平成 23年 度	Nakamizo R	Donor-derived adult T-cell leukaemia	Lancet	免疫健全状態の患者において、無症候性のHTLV-1キャリアーからの移植末梢血幹細胞が原因となって成人T細胞白血病(ATL)、しかも中枢神経孤発性ATLが発症しうることを世界で初めて報告した。	45.217
平成 27年 度	Ninomiya T	Worldwide access to treatment for end-stage kidney disease: a systematic review.	Lancet	本研究は、全世界の腎代替療法を受けている患者数とその将来推計を行った論文。本研究の成果は、今後の腎疾患対策を検討する上で大変重要な内容であり、多くの科学的なWebサイトに掲載されている。また、報告後のわずかな期間に14回引用されている。	45.217
平成 27年 度	Ninomiya T	Effects of intensive blood pressure lowering on cardiovascular and renal outcomes: updated systematic review and meta-analysis.	Lancet	本研究は、厳格な降圧療法が心血管病や腎機能低下のリスクを下げるのに有効であることを証明した論文。世界的に高い評価を受け、報告後のわずかな期間に5回引用されている	45.217
平成 25年 度	Kunisaki Y	Arteriolar niches maintain haematopoietic stem cell quiescence	Nature	造血幹細胞と血管ニッチ間の機能における新しいモデルの提唱。外部から極めて高く評価されている。	41.456
平成 24年 度	Hara S	Efficacy of immunoglobulin plus	Lancet	重症川崎病に対するステロイド併用の無作為比較試験	39.060

		prednisolone for prevention of coronary artery abnormalities in severe Kawasaki disease (RAISE study) : a randomised, open-label, blinded-endpoints trial.			
平成25年度	Baba E	Regorafenib monotherapy for previously treated metastatic colorectal cancer (CORRECT) : an international, multicentre, randomised, placebo-controlled, phase 3 trial	Lancet	本試験の結果を根拠として、本邦の大腸癌の保険診療において新薬 Regorafenib が承認された。	39
平成25年度	Hayashi K	Induction of mouse germ-cell fate by transcription factors in vitro.	Nature	始原生殖細胞を誘導するために十分な転写因子群を同定	36.28
平成24年度	Hagihara A	Prehospital Epinephrine Use and Survival Among Patients With Out-of-Hospital Cardiac Arrest.	JAMA. 307: 1161-1168, 2012	CONCLUSION : Among patients with OHCA in Japan, use of prehospital epinephrine was significantly associated with increased chance of return of spontaneous circulation before hospital arrival but decreased chance of survival and good functional outcomes 1 month after the event.	35.289
平成24年度	Hagihara A	Intravenous epinephrine use before hospital arrival and survival among out-of-hospital cardiac arrest patients.	JAMA 2012; 307 (11) :1161-1168	病院外心肺停止患者に対するエピネフリンの投与は長期予後の悪化と関連していることを明らかにした。BMJの書評("All you need to read in the other general journals"; BMJ 2012;344::e2118 doi:: 10.1136/bmj.e2118) で取り上げられた。現時点で、約100回引用されている。	35.289

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

平成 24年 度	Hagihara A	Use of epinephrine for cardiac arrest prior to hospital arrival.	JAMA 2012; 308 (1) :29-31.	同上	35.289
平成 24年 度	Sanefuji M	Mutations in the RNA exosome component gene EXOSC3 cause pontocerebellar hypoplasia and spinal motor neuron degeneration.	Nat Genet	RNA exosome component gene EXOSC3 の変異は、橋小脳低形成や脊髄運動神経の編成の原因となる	35.209
平成 24年 度	Furue M	Genome-wide association study identifies eight new susceptibility loci for atopic dermatitis in the Japanese population.	Nat Genet	日本人アトピー性皮膚炎に關与する疾患感受性遺伝子を genome-wide association study で明らかにした。	34.520
平成 23年 度	Hayashi K	Reconstitution of the mouse germ cell specification pathway in culture by pluripotent stem cells.	Cell	多能性幹細胞から始原生殖細胞と精子を誘導：朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、産経新聞、日本経済新聞、中日新聞、京都新聞、日刊工業新聞に掲載された。	32.403
平成 26年 度	Yanagi Y	Structural Basis for Marburg Virus Neutralization by a Cross-Reactive Human Antibody	Cell	致命的な出血熱を起こすエボラウイルス及びマールブルグウイルスのエンベロープ蛋白質と中和抗体の複合体の構造を明らかにし、ウイルスと受容体の相互作用及び抗体による中和機構を明らかにした。多くの新聞で取り上げられ紹介された。	32.242
平成 24年 度	Hayashi K	Offspring from oocytes derived from in vitro primordial germ cell-like cells in mice.	Science	多能性幹細胞から機能的な卵子を誘導：朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、産経新聞、日本経済新聞、中日新聞、京都新聞、日刊工業新聞に掲載された。	31.201

○資料 15 組織単位での研究成果の質の高さを示す学会報告等

年度	研究者	タイトル	学会名	研究概要 (研究内容、外部からの評価等)
平成 22年 度	Hashizume M	Phantom Experiment of An Ear Surgery Robot for Automatic Mastroidectomy	Robotics and Mechatronics Division	Certificate of Merit for Best Paper
平成 22年 度	Yokomizo A	Statins reduce the androgen sensitivity and cell proliferation by decreasing the androgen receptor protein in prostate cancer cells.	第26回欧州泌尿器科学会議	EAU Best Abstract 賞を受賞した。
平成 22年 度	清原 裕	地域一般住民における糖尿病発症に対する空腹時血糖及び糖負荷後2時間血糖値のカットオフ値の検討：久山町研究	第53回日本糖尿病学会年次学術集会	福岡県久山町の追跡調査（久山町研究）において、空腹時及び糖負荷後2時間血糖値レベルと将来の糖尿病発症との関連を検討し、糖尿病発症のリスクが上昇する血糖レベルを明らかにした。本学会のプレジデントポスター賞を受賞した。また、このデータを糖尿病の国際誌 Diabetes Care に掲載し、平成23年度に開催された第49回日本糖尿病学会九州地方会で日本糖尿病学会九州支部賞を受賞した。
平成 22年 度	神庭重信	メタボリックシンドロームにおけるうつ状態の有病率：久山町研究	第7回日本うつ病学会総会	福岡県久山町の疫学調査（久山町研究）における断面調査において、メタボリックシンドロームとうつ病の間に密接な関連があることを報告した。本学会の第5回学会奨励賞を受賞した。
平成 22年 度	永田雅治	腎機能低下及び尿蛋白が心血管病死に及ぼす影響：EPOCH-JAPAN 研究	第53回日本腎臓学会学術総会	福岡県久山町の追跡調査を含む7つの追跡研究のデータを統合した大規模子ほーと共同研究において、腎機能低下及び尿タンパクが心血管病死の有意な危険因子であることを明らかにした。本学会の会長賞及びCKD AWARD 2010の奨励賞を受賞した。
平成 22年 度	Naito S	The role of muscarinic receptors in calcium sensitization and their contribution to rho-kinase and protein kinase C pathways in contraction of human detrusor smooth muscle.	第26回欧州泌尿器科学会議	EAU Best Poster Presentation 賞を受賞した。
平成 22年 度	Kikukawa M	The characteristics of a good clinical teacher as perceived by resident physicians in Japan	第42回日本医学教育学会	Award for Academic Excellence を受賞した
平成 23年 度	小川栄一	ウイルス性慢性肝疾患における非侵襲的肝線維化について	第48回日本肝臓学会学術総会、2011年5月	Hepatology Research High Citation 賞（慢性肝炎における、組織学的肝線維化を非侵襲的肝線維化装置（FibroScan）で

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

				比較し、有意な関連性を世界で初めて評価した。)
平成 23年 度	池田康博	網膜色素変性に対する 視神経保護遺伝子治療の 臨床応用	第115回日本 眼科学会総会	失明を来しうる難病、網膜色素 変性患者に対し神経保護遺伝子 である PEDF 遺伝子を網膜下に投 与し、視細胞の喪失を抑制する ことを明らかにした。Rhoto 賞 受賞講演。
平成 23年 度	武田篤信	脈絡膜血管新生におけ るケモカイン・サイトカ インの役割	第45回日本眼 炎症学会	IL27は滲出性加齢黄斑変性など で問題となる脈絡膜血管新生を 促進することを明らかにした。 日本眼炎症学会学術奨励賞受賞 講演。
平成 23年 度	有田量一	ROCK 経路を標的とした糖 尿病網膜症への治療戦略 網膜細小血管障害の視点 から	第17回日本糖 尿病眼学会	糖尿病性網膜微小血管障害にお ける ROCK 経路の重要性を明らか にし、選択的 ROCK 阻害薬 fasudil による病態制御の可能 性とその作用メカニズムについ て示した。福田賞受賞。
平成 23年 度	Tomikawa M	Usefulness of a real- time virtual reality navigation system using an open magnetic resonance imaging : tumor ablation therapy for 50 liver cancers.	ISCAS	Olympus Best Paper Award を受 賞した。
平成 23年 度	土井康文	追跡調査の成績に基づい たわが国におけるメタボ リックシンドロームの診 断基準案：久山町研究	第3回福岡県 医学会総会	福岡県久山町の追跡調査（久山 町研究）において、心血管病発 症を最もよく予測するメタボリ ックシンドロームの診断基準を 検討し、そのデータを国際誌の Stroke に発表した。その業績に 対して本学会で特別賞を受賞し た。
平成 23年 度	Inoguchi T	Oxidative Stress and Chronic Inflammation in Brain is associated with Cognitive Dysfunction in Diabetic db/db Mice	3th Annual Scientific Meeting of the Asian Association for the Study of Diabetes JADEC International Research Promotion Award	糖尿病と認知機能の低下の関連 において酸化ストレスの関与を 示した研究である。アジア糖尿 病学会にて国際研究奨励賞を受 賞した。
平成 23年 度	飯田真大	日本人における胃癌発症 予測モデルの作成：久山 町研究	第53回日本消 化器病学会大 会（JDDW 2011）	福岡県久山町の追跡調査（久山 町研究）において明らかになっ た胃癌発症の危険因子群を用い て胃癌発症のリスクスコアを開 発し、発表した。本学会でポス ター優秀演題賞を受賞した。
平成 24年 度	住本英樹	Regulation of Nox family NADPH oxidases that deliberately produce reactive oxygen species	The 33rd Naito Conference on Oxygen Biology: Hypoxia, Oxidative	「Regulation of Nox family NADPH oxidases that deliberately produce reactive oxygen species」の内容で、招 待講演を行った。

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

			Stress and Diseases.	
平成24年度	有岡 将基	Wnt/ β -catenin シグナル活性化によるリチウムの骨形成促進作用	第65回日本薬理学会西南部会	リチウムは GSK-3 β 阻害し Wnt/ β -catenin シグナル経路を活性化させ、前骨芽細胞の分化を促進させる。骨形成の促進が引き起こされ、骨形成促進薬として有効である可能性が示唆された。(優秀発表賞受賞)
平成24年度	小原知之	Glucose tolerance status and risk of dementia in the community: the Hisayama Study	日本精神神経学会	福岡県久山町の追跡調査(久山町研究)において、糖代謝異常と認知症発症の関係を検討し、そのデータを神経疾患領域の国際誌 Neurology に発表した。その業績により本学会の精神医学奨励賞を受賞した。
平成24年度	伊豆丸堅祐	一般住民における血清 1,25-ジヒドロキシビタミン D3 値 と慢性腎臓病発症の関係:久山町研究	第55回日本腎臓学会学術総会	福岡県久山町の追跡調査(久山町研究)において、血清 1,25-ジヒドロキシビタミン D3 レベルの低下とともに慢性腎臓病発症のリスクが上昇することを明らかにした。本学会で優秀演題賞を受賞した。
平成24年度	古庄憲浩	一般住民における血清グリコアルブミン値と動脈硬化の関連の検討	第5回日本病院総合診療医学会学術総会、2012年9月	優秀演題賞(糖尿病診断における血清グリコアルブミンの有用性を一般住民検診において初めて解析したデータである。)
平成24年度	古庄憲浩	閉経後女性 C 型慢性肝炎における選択的エストロゲン受容体モジュレーター併用ペグインターフェロン α ・リバビリン療法の治療効果	第82回日本感染症学会西日本地方会、2012年11月	感染症優秀論文賞(骨粗鬆症薬と肝炎治療薬の併用により、閉経後 C 型慢性肝炎の治療効果を上昇させたという、肝疾患、内分泌、性差との融合を示した。)
平成24年度	清原 裕	地域高齢者における日常生活動作(ADL)障害の頻度とその原因疾患の時代的推移:久山町研究	第23回日本疫学会学術総会	福岡県久山町で行われた ADL 障害の有病率調査の成績を用いて、地域高齢者における ADL 障害の頻度とその原因疾患の20年間に渡る時代的推移について検討した。本学会で優秀賞を受賞した。
平成25年度	Hirano K	Vascular intrinsic circadian rhythm of myofilament Ca ²⁺ sensitivity.	International Symposium on Regulatory circuits in cell motility	平滑筋研究のパイオニアとして著名な研究者の退職を記念した国際シンポジウムに招待され、平滑筋の生理学に関する最新知見の講演を行った。
平成25年度	鬼丸満穂	Nod1 リガンド刺激による川崎病様冠動脈炎発症モデル	第102回日本病理学会	微生物の細胞壁成分で、受容体 NOD-1 のリガンドである FK565 を血中ないし経口投与することで、川崎病類似の冠動脈炎が発症する事を見だし、川崎病の動物モデルとして有用であるとの研究成果が評価され、ワークショップでの発表を依頼された。
平成25年度	Nakano T	Calcification is a risk factor for intraplaque hemorrhage in coronary atherosclerosis of patients with chronic	American Society of Nephrology" Kidney Week 2013 Annual Meeting.	久山町病理解剖症例において、冠動脈の粥状硬化の状態と慢性腎臓病との関係を検討したところ、慢性腎臓病を持つ患者は、内膜の oxLDL の蓄積や VEGF 発現亢進による内膜内出血のリスク

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

		kidney disease : the Hisayama Study		が高くなる可能性を統計学的に明らかにした研究成果が、国際学会の演題に採択された。(Dr, Nakano 分)
平成25年度	山元英崇	分子病態に基づいた胃腸管間質腫瘍の亜型の確立と腫瘍進展メカニズムの解明	第59回日本病理学会秋期特別総会	GISTの亜型や悪性化のメカニズムについての知見をまとめて報告した。日本病理学会学術研究賞を授与された。
平成25年度	山元英崇	分子病態に基づいた胃腸管間質腫瘍の亜型の確立と腫瘍進展メカニズムの解明	第59回日本病理学会秋期特別総会	GISTの亜型や悪性化のメカニズムについての知見をまとめて報告した。日本病理学会学術研究賞を授与された。
平成25年度	田中茂	IgA腎症患者におけるオックスフォード分類を使用した腎予後予測リスクスコアの作成	第56回日本腎臓学会総会	IgA腎症の症例700例の長期予後を解析し、予後予測のリスクスコアを作成し、別のデータベース700例で外的妥当性を検証した報告で、左記学会において会長賞を受賞した。その後、論文がClin J Am Soc Nephrol誌に掲載された。
平成25年度	久保田健介	Disturbance of anteroposterior ribcage development causes progressive thoracic scoliosis	第60回米国整形外科基礎学会	New investigator recognition award (NIRA) を受賞した。
平成25年度	Kikukawa M	Outcome Evaluation of Hospital Admission Experience of The Fifth Year Medical Students,	10th Asia Pacific Medical Education conference (APMEC)	Best Oral Presentation にノミネートされた。
平成25年度	小川栄一	インスリン抵抗性とC型慢性肝炎の抗ウイルス療法効果	第87回日本感染症学会学術総会、2013年4月	北里柴三郎記念学術奨励賞(感染症領域で有名な北里先生の名を冠した学会賞であり、肝疾患と代謝内分泌を融合させた点で高く評価された。)
平成25年度	Takahashi R	Increased excitability of bladder afferent neurons associated with reduced expression of Kv1.4 α -subunit in rats with spinal cord injury.	第108回米国泌尿器科学会	AUA Best Abstract 賞を受賞した。
平成25年度	有岡 将基	Glycogen synthase kinase-3 β 阻害薬の骨形成促進薬としての可能性	第43回日本口腔インプラント学会学術大会	GSK-3 β の阻害はWnt/ β -cateninシグナル経路を活性化させ、前骨芽細胞の分化を促進させるとともに前破骨細胞の分化を抑制した。骨形成促進薬として有効である可能性が示唆された。(優秀研究発表賞)
平成25年度	有岡 将基	Glycogen synthase kinase-3 β (GSK-3 β) 阻害薬の骨形成促進薬としての可能性	第58回日本口腔外科学会総会・学術大会	GSK-3 β の阻害はWnt/ β -cateninシグナル経路を活性化させ、前骨芽細胞の分化を促進させるとともに前破骨細胞の分化を抑制した骨形成促進薬として有効である可能性が示唆された。(優秀ポスター発表賞)
平成25年度	伊豆丸堅祐	血清1,25-ジヒドロキシビタミンDが慢性腎臓病	第20回日本未病システム学会	福岡県久山町の追跡調査(久山町研究)において、血清1,25-ジヒドロキシビタミンD3レベル

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

		発症に及ぼす影響：久山町研究		の低下とともに慢性腎臓病発症のリスクが上昇することを明らかにした。本学会で優秀演題賞を受賞した。
平成25年度	久保田健介	Disturbance of anteroposterior ribcage development causes progressive thoracic scoliosis	第60回米国整形外科基礎学会	New investigator recognition award (NIRA) を受賞した。
平成25年度	石橋達朗	糖尿病黄斑浮腫（網膜血管透過性のメカニズムとその制御）	第30回日本眼循環学会	第30回日本眼循環学会の松山賞を受賞した講演である
平成25年度	久富智朗	視細胞死の分子機序と手術補助剤BBG開発及びその神経保護治療の可能性	第117回日本眼科学会総会	第18回 ROHTO AWARD を受賞した。
平成26年度	荒田 純平	光ファイバを応用した背骨型アレイ圧力センサの開発	日本コンピュータ外科学会	2013年度講演論文賞を受賞した
平成26年度	赤司 浩一	白血病幹細胞研究のすゝめ	第76回日本血液学会学術集会	第3回日本血液学会賞受賞講演を行った。
平成26年度	吉原 達也	ニトログリセリン投与後の血管内皮機能及び酸化ストレスへのアトルバスタチンの効果に ALDH2 遺伝子多型が及ぼす影響	第35回日本臨床薬理学会学術総会	ニトログリセリンの持続投与は血管内皮機能障害を起こす。アトルバスタチン併用投与はその血管内皮機能障害を改善した。さらに、2型アルデヒド脱水素酵素（ALDH2）遺伝子変異保持者ではニトログリセリンによる血管内皮機能障害が起こりやすいが、アトルバスタチンはALDH2変異保持者においても血管内皮機能を顕著に改善した。（優秀演題賞）
平成26年度	伊豆丸堅祐	Association between non-high-density lipoprotein cholesterol and pathological changes in coronary arteries among population-based autopsy samples in Japan: the Hisayama Study	第78回日本循環器学会学術集会	福岡県久山町の追跡調査（久山町研究）の対象者の剖検例で、nonHDL コレステロール上昇による冠動脈硬化について病理学的に検討した。本学会で第31回 Young Investigator's Award を受賞した。
平成26年度	古庄憲浩	一般住民健常者における血清脂質20分画値と動脈硬化の関連	第9回日本病院総合診療医学会学術総会、2014年9月	臨床研究部門会長賞（血清脂質を20に分画して、動脈効果に関わる分画を初めて指摘したため高い評価を得た。）
平成26年度	Noto H	Effect of rear-wheel operation of a manual wheelchair on user's riding comfort and helper's physical strain while navigating steps	Biomedical Fuzzy System Association	International Journal of Biomedical Soft Computing and Human Sciences, The Best Paper Award (November 15, 2014) を受賞した。
平成26年度	Hirano K	Pivotal Role of Rho-Associated Kinase 2 in Generating the Intrinsic Circadian Rhythm of Vascular Contractility.	第56回日本平滑筋学会	10回日本平滑筋学会栗山賞受賞講演を行った。

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

平成 26年 度	清原 裕	地域住民における随時血圧、中心血圧、家庭血圧が頸動脈病変に及ぼす影響：久山町研究	第21回日本未病システム学会学術総会	福岡県久山町の地域住民を対象に随時血圧、中心血圧および家庭血圧を測定し、頸動脈病変との関連を検討した。本学会で最優秀演題賞を受賞した。
平成 26年 度	Mikasa S	A study of the influence of partial volume correction on the heterogeneous FDG uptake of multiple metastases in patients with breast cancer.	61st Annual Meeting, Society of Nuclear Medicine and Molecular Imaging	乳癌で多発転移病巣を有する症例では、PETでFDG集積を測定すると病巣ごとに異なる値を示すことがしばしばある。一方、PET検査は空間分解能が劣ることから小さい病巣ではFDG集積を過小評価している可能性が考えられた。我々がすでに考案している部分容積効果補正を用いて、病巣ごとのサイズに対応したFDG集積補正を行ったところ患者内での結果のばらつきは小さくなり、病巣間の代謝の相違は測定精度の影響があることが示唆された。 2014 SNMMI-TS Abstract Award, および 3rd Place Technologist Best Poster Awardを受賞した。
平成 26年 度	Akamatsu G	Effect of statistical noise on reproducibility and accuracy of maximum and peak SUV: a phantom study.	The 4th Annual International Asian Society of Nuclear Medicine Technology Conference	癌を診断するPET検査では、薬剤の集積程度を対象となる領域内の最大値で表示する方法や平均値で表示する方法がある。しかし、計数値が十分でない場合は統計学的な変動が結果に大きく影響する。この影響は最大値表示で大きく、ピーク値表示で影響が小さいことが明らかとなった。 Best Presentation Awardを受賞した。
平成 27年 度	笹栗俊之	ALDH2遺伝子多型がニトログリセリンの効果と血管内皮機能低下作用に及ぼす影響	ALDH2遺伝子多型がニトログリセリンの効果と血管内皮機能低下作用に及ぼす影響	ニトログリセリンの持続投与は血管内皮機能障害を起すのが、アトルバスタチンを併用すると、その抗酸化作用により血管内皮機能障害が改善された。さらに、ALDH2遺伝子多型保持者ではニトログリセリンによる血管内皮機能障害が起りやすいが、アトルバスタチンはその血管内皮機能を顕著に改善した。 (優秀演題賞)
平成 27年 度	Nakashima Y	Pathogenesis of early and intermediate lesions of human coronary atherosclerosis: accumulation of plasma-derived lipids and dispersion of smooth muscle cells	11th International Congress on Coronary Artery Disease.	ヒトの冠状動脈のDITから初期および前粥腫病変までの発生過程をつうじ、内膜の脂肪沈着やマクロファージ浸潤による血管平滑筋細胞の内膜内分散が増殖・細胞死の平衡によらず成立しているとの内膜の細胞動態解析の研究成果が、国際冠状動脈疾患学会の演題に採択された。
平成 27年 度	二宮利治	地域高齢者における糖尿病と頭部MRI上の海馬萎縮との関係：久山町研究	第22回日本未病システム学会学術総会	福岡県久山町の高齢者を対象とした頭部MRI検査と循環器健診の成績を用いて糖尿病と海馬萎縮との関連を検討し、糖尿病、とくに食後高血糖の指標である

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

				糖負荷後2時間血糖値が海馬萎縮と強く関連することを明らかにした。本学会で優秀演題賞を受賞した。
平成27年度	二宮利治	一般住民における臥位高血圧と心血管病発症との関連：久山町研究	第38回日本高血圧学会総会	福岡県久山町の追跡調査（久山町研究）において、臥位高血圧（座位血圧は正常）は心血管病、とくに脳卒中発症の有意な危険因子であることを明らかにした。本学会で女性研究者奨励賞を受賞した。
平成27年度	二宮利治	長期にわたる糖尿病は高齢者の海馬萎縮と関連する：久山町研究	第26回日本疫学会学術総会	福岡県久山町の高齢者を対象とした頭部MRI検査の成績を用いて糖尿病と海馬萎縮との関連を検討し、糖尿病の罹病期間が長くなるに伴い海馬萎縮が進行することを明らかにした。本学会で最優秀演題賞を受賞した。
平成27年度	朔 啓太	The Neuro-Mechanical unloading for acute myocardial infarction strikingly reduces the infarct size and prevents heart failure in the long term	アメリカ心臓病学会（AHA）	心筋梗塞の新規治療法の開発についての報告、Best abstract awardを受賞した。
平成27年度	朔 啓太	Transvascular Total Left Ventricular Unloading using Impella® in the Acute Phase of Myocardial Infarction Markedly Reduces Infarct Size, Preserves Cardiac Function and Prevents Chronic Heart Failure	ヨーロッパ心臓病学会（ESC）	心筋梗塞における左室補助装置使用の有用性について報告、ESC travel grant awardを受賞した。
平成27年度	小早川 和	急性高血糖はマウス及び患者における脊髄損傷後の機能回復を蘇我する	日本整形外科学会	平成27年度日本整形外科学会奨励賞を受賞した。
平成27年度	田口智章	先天性機能的腸管不全に対する間葉系幹細胞を用いた新規治療法の開発	日本小腸移植研究会	第28回日本小腸移植研究会において、研究奨励賞を受賞した発表である。
平成27年度	田口智章	神経芽腫に対する内視鏡外科手術	日本小児血液・がん学会学術集会	第57回日本小児血液・がん学会において、優秀ポスター賞を受賞した発表である。
平成27年度	Baba T	Nuclear Receptor and metabolism	19th International conference on Cytochrome P450	ASBMB: American Society for Biochemistry and Molecular Biologyより、JBC/Herbert Tabor Young Investigator Awardを受賞した。
平成27年度	Akamatsu G	A new method to calculate standardized uptake value ratio using CT images for amyloid PET/CT images.	第71回 日本放射線技術学会総会学術大会	アルツハイマー型認知症で見られる脳内アミロイド沈着を検出するPET検査について、同時に撮影したCT画像を利用することでアミロイド沈着を半定量的な集積比で評価する新たなパラメータを考案した。Cypos金賞を受賞した。
平成27年度	Akamatsu G	Optimization of region-of-interest template for quantification of	62nd Annual Meeting, Society of Nuclear	アルツハイマー型認知症で見られる脳内アミロイド沈着を検出するPET検査について、結果を定量的に評価するための関心傾

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

		amyloid deposition for PiB-PET.	Medicine and Molecular Imaging	域の設定方法を研究し、最も適切となる方法を考案した。 2015 SNMMI-TS Travel Award を受賞した。
--	--	---------------------------------	--------------------------------	---

○資料 16 組織単位での研究成果の質の高さを示すその他の研究活動

年度	研究者	タイトル	学会名	研究概要 (研究内容、外部からの評価等)
平成 22年 度	Horie S	Differential effects of spatial frequency on the processing of Japanese Kanji and Kana: An MEG analysis	29th International Congress of Clinical Neurophysiology	漢字と仮名の脳内認知機構の違いを脳磁図で研究し、Young investigator award を受賞した。
平成 22年 度	大川恭行	Chd2 determines myogenic cell fate	第8回幹細胞シンポジウム	骨格筋分化の決定がヒストンバリアント H3.3 の機能について概説を行った
平成 22年 度	大川恭行	骨格筋分化へ運命決定するクロマチンリモデリング因子 Chd2 によるゲノムマーキング機構	H22年度遺伝研研究会「細胞核超分子複合体の動態とその機能」	骨格筋分化の決定がヒストンバリアント H3.3 の機能について概説を行った。
平成 22年 度	大川恭行	Genomic re-organization accompanies cellular differentiation to temporally control gene expression	第8回国際ゲノム会議	遺伝子の核内での空間的位置制御について概説を行った。
平成 22年 度	濱田裕子	子どもホスピスをつくろう		読売新聞 平成22年7月24日に掲載された。
平成 23年 度	清原千香子	Lung cancer and smoking habit.		Encyclopedia of Cancer, 3rd Edition. Springer-Verlag. NY 出版(総ページ数3984)のがんの百科事典(英文)の分担執筆
平成 23年 度	鶴屋和彦	福岡腎臓病データベース研究 (Fukuoka Kidney Disease Registry: FKR)		透析導入前の慢性腎臓病患者を対象とした前向きコホート研究である。血清・尿・便などの生体試料から得られるバイオマーカーの解析だけでなく、食事量調査・生活習慣アンケートなどを用いて、慢性腎臓病の悪化要因や予防法を明らかにすることを目的とする。腎生検病理組織標本を解析に用いていることも特徴的であり、IgA腎症サブコホートの解析結果は平成25年の日本腎臓学会会長賞を受賞したほか、Clin J Am Soc Nephrol 誌に掲載され評価されている。
平成 23年 度	濱田裕子	子どもホスピスを作ろう		朝日新聞 平成23年3月7日に掲載された。
平成 23年 度	濱田裕子	重い障害ある子と家族を支える 子どもホスピスの試み		西日本新聞 平成23年5月16日に掲載された。

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

平成 23年 度	濱田裕子	こころのオルゴール「子どもホスピス」		RKB ラジオ 平成 23 年 9 月 26 日、11 月 10 日放送
平成 24年 度	Yamada E	Morphing human faces into monkey faces reveals species-dependent visual processing of faces: A high-density ERP study	CME2012	顔の種差に関する脳内認知機構を事象関連電位で研究し、Young investigator award を受賞した。
平成 24年 度	大川恭行	遺伝子をすべて見る研究への挑戦	「京」シンポジウム：新生命科学分野開拓とスーパーコンピュータ「京」	次世代シーケンサーを使った研究方法について講演を行った。
平成 24年 度	馬場園明	がんにおける最適な診療圏域作成のための二次医療圏集約の試み	日本医療・病院管理学会	がんに関する医療圏の設定方法を開発したものであり優秀論文賞を受賞した。
平成 24年 度	濱田裕子	子どもホスピスプロジェクト：病気の子へ笑いのプレゼント		朝日新聞 平成 24 年 5 月 9 日に掲載された。
平成 25年	中尾新太郎	加齢黄斑変性における ROCK 阻害マクロファージ"しつけ"療法	第 3 回わかもと先進眼科医療研究会	左記研究会で金賞を受賞した。
平成 25年 度	大川恭行	骨格筋分化運命決定のメカニズムを追う〜クロマチン構造からみる筋形成〜	若手による骨格筋研究会	骨格筋分化の決定がヒストンバリエーション H3.3 の機能について概説を行った。
平成 25年 度	Hagihara A	The aging population and future demand for emergency ambulances in Japan.	Internal and Emergency Medicine 2013; 8:431-437.	救急搬送及び救急出動の需要の将来予測を行った。この研究は日経新聞（2013 年 4 月 8 日）の書評で取り上げられた。
平成 25年 度	樗木晶子	医療～ [狭心症]		NHK 総合「はっけん TV (テレビ)」 平成 25 年 5 月 21 日放送
平成 25年 度	樗木晶子	危険な不整脈 危険ではない不整脈 進化する心電図検査機器		KBC「とっても健康ランド」 平成 25 年 8 月 17 日放送
平成 25年 度	濱田裕子	福岡子どもホスピスプロジェクト活動紹介		RKB 毎日放送 平成 25 年 10 月放送
平成 26年 度	飛松省三	認知症の早期電気生理学的診断ツールの開発	上原記念生命科学財団	認知症（アルツハイマー病）の根本的治療薬はないが、将来の予防的介入医療の導入のための正確で信頼性のある早期電気生理学的診断ツールの開発を行うことが評価された。
平成 26年 度	坂本昌平	Vesicular nucleotide transporter (VNUT) によるホルモン分泌制御と代謝調節機構	第 87 回日本内分泌学会学術総会	インスリンなどのホルモンと共分泌される ATP がプリン受容体シグナルを活性化し、ホルモン分泌を制御していることを明らかにした。ATP をホルモン分泌顆粒に取り込む VNUT を阻害するとインスリン分泌の亢進と肝臓でのインスリン抵抗性の改善がみられたことから、VNUT は新たな糖尿病治療

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

				薬の標的であることが明らかになった。平成 26 年 10 月 22 日朝日新聞に研究が紹介された。
平成 22 年度	平野勝也	血管トーン調節の分子機構とその異常	第 87 回日本生理学会大会シンポジウム	国内の生理学関係の最大の学会において、オーガナイザーとしてシンポジウムを企画した。
平成 22 年度	前田善久	Enhanced contractile response of the basilar artery to platelet-derived growth factor in subarachnoid hemorrhage. Stroke 40: 591-596, 2009	第 26 回スパズム・シンポジウム	毎年開催されている脳血管攣縮関連の代表的な学会において、その年に発表された最も優秀な脳血管攣縮に関する論文として、第 1 回優秀論文賞受賞した。
平成 23 年度	平野勝也	貯蔵部作動性 STIM1 リン酸化反応とカルシウム流入制御	第 7 回 TRP 研究会 「TRP チャネル群の動作原理と生理・病理機能の統合的理解」	生理学研究所で開催された、関連の研究会に招待を受け、講演を行った。
平成 23 年度	吉川雄一郎	Impaired feedback regulation of the receptor activity and the myofilament Ca ²⁺ sensitivity contributes to increased vascular reactivity after subarachnoid hemorrhage. J Cereb Blood Flow Metab 30: 1637-1650, 2010	第 27 回スパズム・シンポジウム	毎年開催されている脳血管攣縮関連の代表的な学会において、その年に発表された最も優秀な脳血管攣縮に関する論文として、第 2 回優秀論文賞を受賞した。
平成 23 年度	清原 裕	ナイスステップな研究者 2011	文部科学省科学技術政策研究所	長年にわたる福岡県久山町の追跡調査（久山町研究）に携わった業績に対して文部科学省より同賞を受賞した。
平成 24 年度	清原 裕	遠山椿吉記念 第 2 回健康予防医療賞	財団法人東京顕微鏡院	長年にわたる久山町研究の業績により同賞を受賞した。
平成 24 年度	永淵正法	ウイルス糖尿病の発症機構。	九州大学研究教育プログラム・研究拠点形成プロジェクト特別枠、代表	ウイルス糖尿病の発症機構に関して、自然免疫の重要性、インターフェロニンシグナル関連分子の意義、さらには、感受性遺伝子の同定とその機序の解明を推進した。結果として 2015 年に発表した国際的にも高い権威を有する Nature Communications, EBioMedicine, の論文発表へと繋がった。
平成 24 年度	江崎仁一	有棘細胞癌に対する動注化学療法施行例のまとめ	第 111 回日本皮膚科学会総会	第 111 回日本皮膚科学会総会 ポスター賞一等賞並びに The 1st William Epstein Memorial Award を受賞した。
平成 25 年度	清原 裕	予防賞	第 28 回日本心臓財団	長年にわたる福岡県久山町の追跡調査（久山町研究）に携わり、わが国の循環器疾患の要望に貢献した業績に対して日本心臓財団より同賞を受賞した。

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

平成 25年 度	竹井賢二郎	Galactomyces Ferment Filtrate (SK-II<ピテラ®>) に認められる抗酸化作用の解明-Aryl Hydrocarbon Receptor の重要性について-	第31回日本美容皮膚科学会	第31回日本美容皮膚科学会 優秀演題賞を受賞した。
平成 26年 度	大川恭行	ヒストンH3バリエーションの多様性	ヒストンバリエーション研究会	国内のヒストンバリエーション研究者を集め、学会を立ち上げた。
平成 26年 度	吉丸耕一郎	乳歯幹細胞を応用したヒルシュスプルング病類縁疾患に対する新規細胞治療法の開発	第2回TR推進合同フォーラム	小児期に発症し蠕動不全のため機能的腸管不全をきたすヒルシュスプルング病類縁疾患(H類縁)に対する間葉系幹細胞を用いた新規治療法の確立を目指す。
平成 26年 度	岡田誠司	Disturbance of ribcage development causes progressive thoracic scoliosis: The creation of a nonsurgical structural scoliosis mode in mice.	Journal of bone and joint surgery	アメリカ整形外科学会 (Orthopaedi Research Society) New Investigator Recognition Awardを受賞した。
平成 26年 度	柳 佑典	乳歯幹細胞を用いた立体肝組織移植による小児代謝性肝疾患根治療法の開発	第2回TR推進合同フォーラム	乳歯幹細胞より分化誘導した肝細胞をバイオ3Dプリンターを用いてin vitroで立体組織化し、レシピエント肝臓に組織移植を行うことで代謝性肝疾患に対する酵素補充を行う新規治療法開発に関する研究である。
平成 26年 度	柳 佑典	乳歯幹細胞より分化誘導した肝細胞を用いた立体肝組織移植による小児希少遺伝性代謝性肝疾患治療法の開発	九州大学テクノロジーフォーラム	乳歯幹細胞より分化誘導した肝細胞をバイオ3Dプリンターを用いてin vitroで立体組織化し、レシピエント肝臓に組織移植を行うことで代謝性肝疾患に対する酵素補充を行う新規治療法開発に関する研究であり企業との共同研究契約に発展した。
平成 26年 度	小澤 未央	ロレアル・ユネスコ女性科学賞 国際奨学金	国連教育科学文化機関、ロレアル	福岡県久山町の追跡調査(久山町研究)に携わり成果を上げた業績に対し銅賞を受賞し、留学の奨学金を得た。
平成 26年 度	樗木晶子、向井靖	不整脈 一技術の進歩で根治治療も可能に一早期発見・早期治療の重要性		朝日新聞 平成26年11月8日に掲載された。
平成 26年 度	樗木晶子	ウイラブヒューマン		RKBラジオ 平成26年9月1日～3日放送
平成 26年 度	濱田裕子	態勢整備へ国・県連携～子どもの在宅医療ケア～		朝日新聞 平成26年9月15日に掲載された。
平成 26年 度	真崎勝久	グリアシンシチウム破綻が脱髄の形成・進展に及ぼす影響の解析	日本神経免疫学会	第26回日本神経免疫学会研究創設賞を受賞した。
平成 26年 度	米川 智	肥厚性硬膜炎の世界初の全国臨床疫学調査報告	日本内科学会	第27回日本内科学会奨励賞を受賞した。
平成 26年 度	米川 智	世界初の日本人肥厚性硬膜炎全国臨床疫学調査二次調査159例の解析結果報告	日本神経学会	第55回日本神経学会優秀口演賞臨床部門最優秀賞を受賞した。
平成	加来裕美子	乳房外パジェット病127	第113回日	

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

26年度		例・135病変の検討～九州大学皮膚科17年間の経験～	本皮膚科学会総会	第113回日本皮膚科学会総会アブストラクト賞を受賞した。
平成27年度	松田泰斗	TLR9 signaling in microglia attenuates seizure-induced aberrant neurogenesis in the adult hippocampus.	NEUROSCIENCE 2015, Chicago	トラベルアワード賞を受賞した。
平成27年度	中菌寿人	Long-term plasticity in human visual cortex by transcranial alternating current stimulation.	The 9th International Conference on Complex Medical Engineering, 2015/6/20.	経頭蓋交流電気刺激による視覚野の可塑性誘導について研究史、Best student awardを受賞した。
平成27年度	樗木晶子	運動と和食で心健やかに		西日本新聞 平成27年4月12日に掲載された。
平成27年度	樗木晶子	外来で役立つ不整脈診療の勘所		臨床と研究対談 平成27年9月15日 インタビュアー：みどりクリニック院長 長尾哲彦先生
平成27年度	樗木晶子	「女医さん、辞めないで！」		時事通信社 時事ドットコム 平成27年9月に掲載された。

○資料17 組織単位での研究成果の質の高さを示す架橋型研究活動

年度	分野	テーマ	共同研究者
平成23年度～27年度	病理病態学	ヒトのアテローム性動脈硬化の発症機構に関する組織学的並びに免疫組織化学検討	福岡赤十字病院病理部、福岡大学医学部病理学、久留米大学医学部病理学、浜の町病院病理診断科、九州医療センター・病理部
平成23年度～27年度		急性大動脈解離の発生機序の解明並びに発症予知に関する研究	神戸赤十字病院心臓血管外科、福岡赤十字病院病理部、高輝度光科学研究センター利用研究促進部門、神戸大学医学研究科心臓血管外科学
平成24年度～27年度		おとり遺伝子による癌の血管新生抑制を標的とした純国産型遺伝子治療法の開発	金沢医科大学
平成25年度～27年度	病理病態学	再生医療の基盤技術となる小口径 Scaffold free 細胞チューブを用いた血管様構造体の橋渡し研究	佐賀大学大学院工学系研究科先端融合工学
平成26年度～27年度		難治性血管炎に関する調査研究	杏林大学腎臓・リウマチ膠原病内科
平成26年度～27年度		肺癌における R-spondin-Lgr6 シグナ	福岡歯科大学基礎医歯学部門生体構造学講座病態構造学

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

		ル系の発現・機能解析	
平成 27 年度		ANCA 関連血管炎の新規治療薬開発を目指す戦略的 シーズ探索と臨床的エビデンス構築	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科薬害監視学
平成 26 年度～ 27 年度		難治性血管炎に関する調査研究	杏林大学腎臓・リウマチ膠原病内科
平成 24 年度	病態修復内科学	マイクロ波反射計を用いた心拍変動率評価技術の開発とメンタルヘルスケアへの適応	九州大学産学連携センター、九州大学基幹教育院
平成 27 年度	臨床・腫瘍外科学	内視鏡手術の視野の安定化と術中指示の可視化を可能にする機器の開発	九州大学工学研究院 機械工学部門
平成 27 年度		若年者大腸癌における次世代シーケンサーを用いた網羅的遺伝子解析	九州大学農学研究院生命機能科学部門
平成 27 年度		進行大腸癌患者における白金錯体系薬剤の腫瘍組織中動態と薬理効果・毒性発現に関する検討	九州大学総合理工学研究院エネルギー物質科学部門 徳島大学薬物動態制御学、京都薬科大学生命薬科学系衛生化学
平成 26 年度		生体機能分子の網羅的かつ数理解析による大腸癌切除患者の予後識別方法の確立	九州大学農学研究院生命機能科学部門
平成 24 年度～ 27 年度	麻酔・蘇生学	痛みの機序と治療に関する研究、とくに慢性疼痛に対する創薬を目指した	九州大学薬学研究院臨床薬学部門ライフノベーション分野
平成 22 年度	実験動物学	トランスジェニックニワトリの開発に関する共同研究	名古屋大学大学院工学研究科
平成 22 年度		ベトナムにおける鳥インフルエンザの疫学調査に関する共同研究	鳥取大学農学部
平成 24 年度		キヌレニン経路関連遺伝子改変マウスによる中枢神経系障害と神経保護作用機序に関する共同研究	セゲド大学理学部（ハンガリー）
平成 26 年度		豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）抵抗性	東海大学農学部、静岡県畜産技術研究所中小家畜研究センター

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

		ブタの開発に関する共同研究	
平成 26 年度		筋ジストロフィーマ イクロミニブタの開 発に関する共同研究	東海大学農学部、静岡県畜産技術研 究所中小家畜研究センター
平成 26 年度	系統解剖学	反応拡散系のパター ン形成のダイナミク ス	九州大学理学研究院
平成 26 年度		細胞壁の力学的強度 の計測	九州大学先端物質科学研究所
平成 27 年度		細胞選別現象の数理 モデル化	九州大学理学研究院
平成 27 年度		網膜血管のリモデリ ング現象の数理	九州大学マスコアインダストリ
平成 20 年度～	性差生物学	次世代シーケンサー による大規模デー タ解析	九州大学生体防御医学研究所
平成 24 年度～		Ad4BP の評定遺伝子の 探索	台湾中央研究院分子生物学研究所
平成 24 年度～		マウス胎児生殖腺の 性分化メカニズム	United Kingdom, Imperial College of London
平成 25 年度～		コレステロール合成 の中間体測定	韓国科学技術院 (KAIST)
平成 27 年度～		Ad4BP のエネルギー制 御に関する研究	台湾成功大学
平成 27 年度～	消化器・総合外科 学	線虫 <i>C. elegans</i> の嗅 覚機構を模倣した乳 癌検知システムの研 究開発	九州大学システム情報科学研究院
平成 23 年度～	幹細胞再生修復医 学	造血幹細胞の対称・ 非対称分裂の制御機 構に関する研究	英国サウサンプトン大学、スイス連邦 ローザンヌ工科大学
平成 24 年度～	国際医科学教育ユ ニット	新規化合物の生物学 的活性についての研 究	九州大学先端物質科学研究所
平成 27 年度～	発生再生医学	ChIP-seq データの統 合的データベース (ChIP-Atlas) の開 発	DBCLS、RIKEN, CLST
平成 22 年度～	整形外科学	バイオメカニクス 関節の三次元動態解 析、力学試験、シミ ュレーション	九州産業大学工学部、福岡工業大学、 九州大学応用力学研究所
平成 24 年度～		炭酸アパタイトを用 いた骨補填材料の開 発	九州大学歯学研究院生体材料科学

九州大学医学部・医学研究院 分析項目Ⅱ

平成 26 年度～		イメージマッチング法を用いた肩関節 3 次元動態解析	九州産業大学工学部
平成 26 年度～		ブタ屈筋腱を用いた様々な腱縫合法の強度実験	福岡工業大学工学研究科
平成 27 年度	細菌学	小児の腸内菌叢のメタゲノム解析	九州大学農学研究院生命機能科学部門システム生物工学、九州大学微生物工学研究室
平成 21 年度～ 24 年度	神経病理学	1 分子蛍光イメージングを用いたプリオン蛋白オリゴマーの検出	九州大学先端物質化学研究所分子集積化学部門
平成 25 年度～	医化学	高感度エピゲノム解析のためのマイクロ化学システムの開発	東京大学大学院工学系研究科、マイクロ化学技研

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

年度を追うごとに受賞の件数が増加しており、平成27年度は79件まで増えた（資料13、14（14～18頁））。インパクト・ファクター30以上の原著論文数が30編に上ることから、医学研究院において活発な研究活動が行われていること、医学研究院における独自性の高い研究が認められていることがわかる。これは研究成果に関する方針（OP、アウトカムポリシー）の中で積極的にインパクトファクターの高い論文採択を目指すという学術的インパクトの高い実績である。また、学会賞を受賞するような多くの質の高い学会報告等の活動を行うとともに、マスコミを活用した情報発信も積極的に行ってきた（資料15、16（19～30頁））。これは研究成果に関する方針（OP、アウトカムポリシー）の中で成果を社会に還元するという社会的関連性の高い実績である。

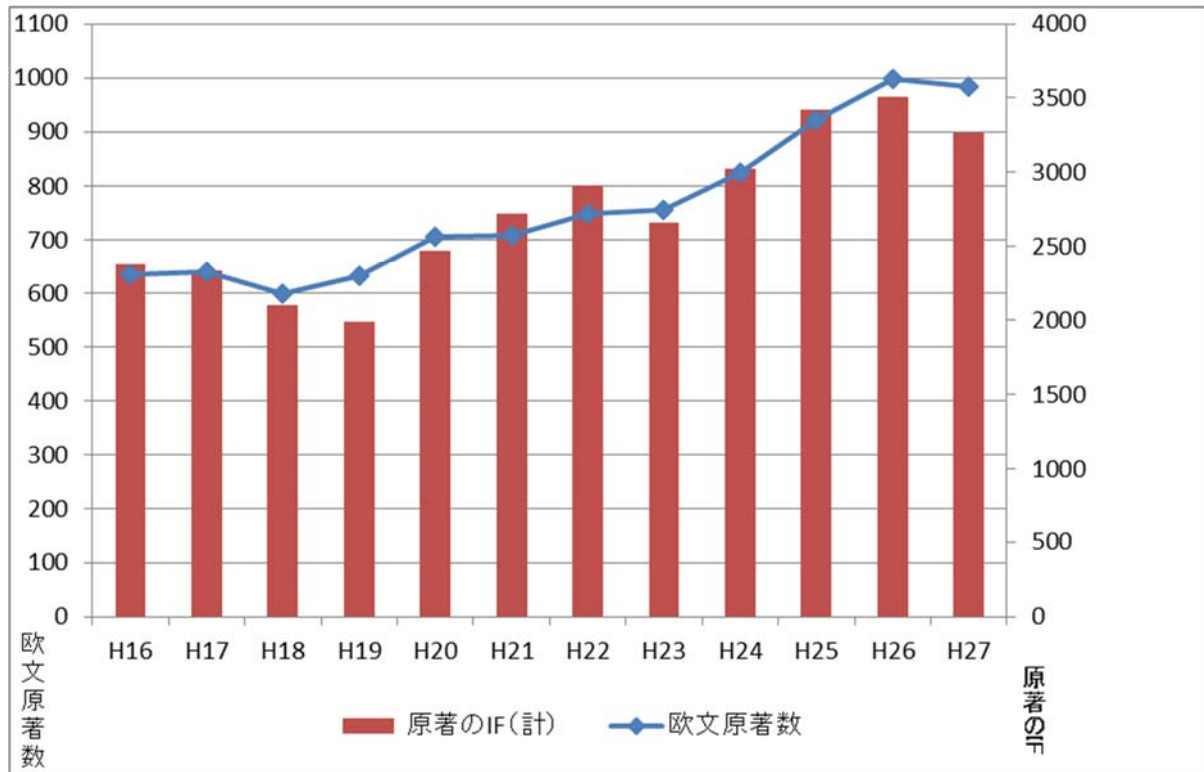
以上のことから、期待される水準を上回ると言える。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

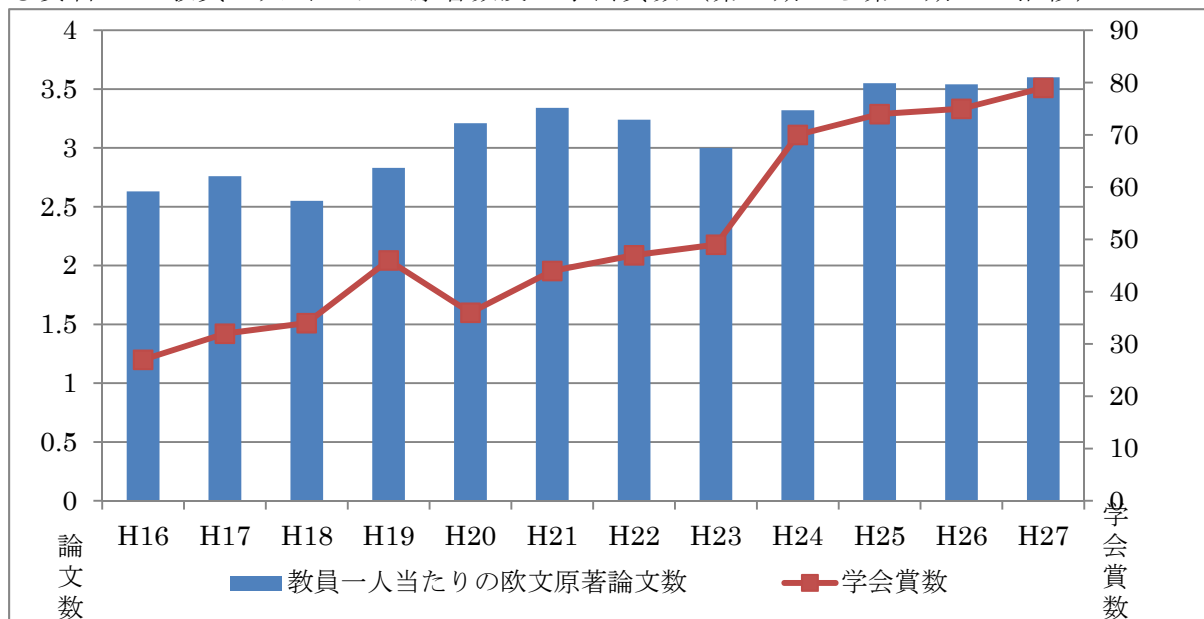
(1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

第1期からの原著論文の数並びにインパクトファクター合計の推移を示す(資料18、19)。両指数ともに右肩上がりでは増加している。また、科学研究費補助金についても、前述のごとく平成27年度には教授退任(69名中12名)による減少はあったものの、右肩上がりに増加しており、顕著な質の向上を示している(資料20)。

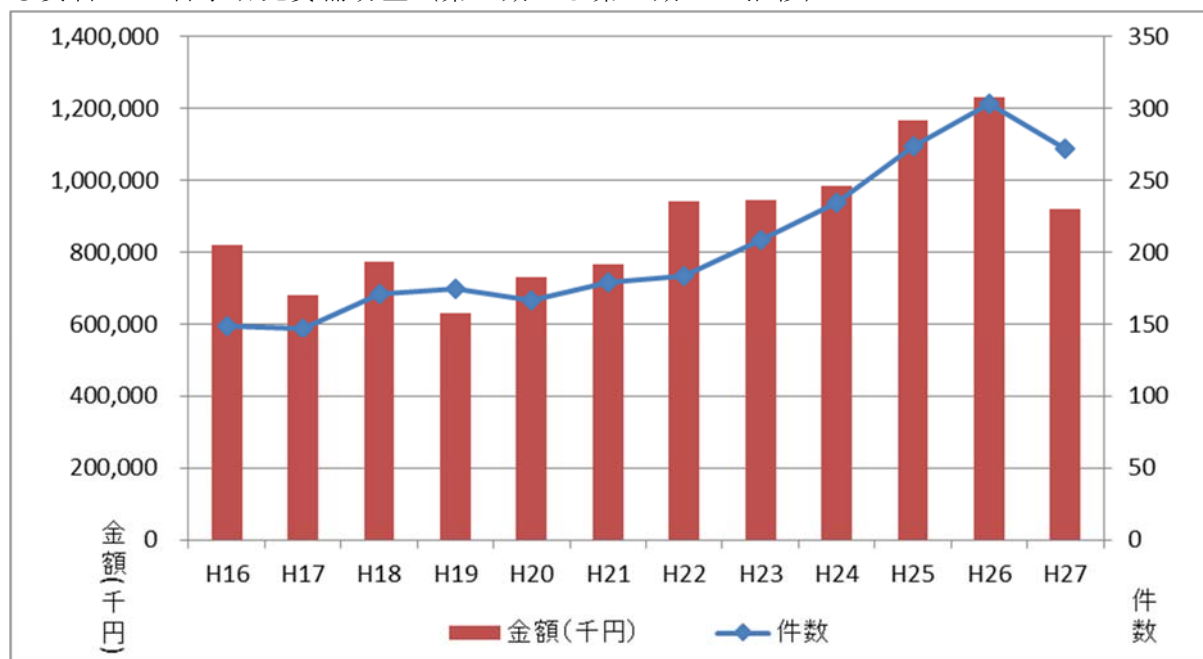
○資料18 原著論文数(第1期から第2期への推移)



○資料19 教員一人当たりの原著数及び学会賞数(第1期から第2期への推移)



○資料 20 科学研究費補助金（第1期から第2期への推移）



(2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

第1期からの原著論文の数並びにインパクトファクター合計は右肩上がりで着実に増加している（資料18、19（34頁））。